

greetings  
of the year  
by the President

## 第4期中期計画を策定し 新たな取組をスタートさせる 非常に重要かつ、本学にとって節目となる一年に

令和6年1月4日(木)、仕事始めにあたり、竹之下誠一理事長兼学長より、全職員を対象に、新年の挨拶がありました。

(以下抜粋)

今年第4期中期目標に基づき、中期計画を策定し、新たな取組をスタートさせる非常に重要かつ、本学にとって節目となる年です。実際に皆さんの胸の中には、これからの本学について、どのような将来像が描かれているのでしょうか？

### 俯瞰した視点、中長期的な目標 大学の将来像を強く意識

私たちは目の前の課題を一つずつ解決していき、一步一步前進し、目標や計画を達成していきます。それを言い換えれば、私たち一人一人が担う業務には、その先に何か目指している将来像があるということです。新たな中期計画を立案する年だからこそ、幹部職員の皆さんは、近視眼的になりがちな現場において、俯瞰した視点、中長期的な目標を示し、教職員の皆さんと大学の将来像を共有することを強く意識してください。

例えば、教育に関しては、保健科学部において、より高度な医療技術者を養成する環境を提供するために大学院設置に向け準備を進めることは喫緊の課題です。それは単に多彩かつ専門性の高い医療人材を育成、輩出することで、多くの医療機関から頼られる存在となるというだけの話ではありません。同時にそれは、学生たちに、自分の将来に具体的な夢を抱き、その夢の実現に向けて学ぼうという意欲をかき立てることに繋がります。すなわち活気と躍動感のある大学像を

実現し、18歳人口がますます減っていく中で、大学の魅力を向上させることにつながる重要な取組なのです。

### 世界からコミュニケーションを 常に求められる研究機関へ

さらに、研究においては、本学が担うF-REIの研究分野を軌道に乗せていくことはもちろんのこと、例えば昨年協定を結んだユリウス・マクシミリアン大学ヴェルツブルクとの共同研究などをとおして、研究分野に厚みと深みを持たせていきます。福島県の基幹医療機関として、将来にわたり高い医療水準を維持しながら地域の医療を安定的に支えるためには、常に世界レベルでの幅広い知見を吸収し、発信していくことが必要不可欠なのです。国内に留まらず国外においても本学の名前が医学・看護学・保健科学の研究者の間で認知され、常にコミュニケーションを求められる研究機関となることを目指していきます。

医療においては、本県の中核的医療機関・各種拠点病院として、引き続きその機能を十分に発揮するとともに、4月から施行される医師の働き方改革に適切に対応できるように準備や対策を講じていかなければなりません。適切な職場環境の実現は、結果として将来にわたりより良い人材獲得に大きく貢献する重要な要素であり、私たちは社会のモデルとされる体制を目指したいと思えます。

また、昨年末、開催が発表された「大ファン・ゴッホ展」(仮題)と連携したアートセラピーに取り組んでいくために各種準備を本格化していきます。芸術鑑賞とホルモンの分



泌や自律神経の状態の関係を数値化するという世界でも初めての挑戦です。病気の患者さんに絵画がポジティブな効果をもたらすことを示すことができれば、これからの病院の在り方、作り方にも一石を投じることが出来るかもしれません。

### 真のリスクは現状維持にあり 果敢にチャレンジを

今回、アートと医学の連携という話を聞いてあるいは戸惑った方も多いかもかもしれませんが、この事に限らず私たちは常に新しいことにチャレンジしていきます。失敗をマイナスと捉えるような現場では、チャレンジはリスクでしかないでしょう。

しかし、真のリスクは現状維持にこそあるのです。果敢にチャレンジを続け、積極的に変化に向き合しましょう。そして、変化を進化に変え、新しい価値を創造する大学として、龍のごとく飛躍し、福島の復興を本学から発信する一年となることを確信しております。

挨拶の全文は、  
ホームページ  
「学生・教職員の方へ」  
に掲載しています。



## 大ファン・ゴッホ展(仮題)でアートセラピーのさらなる臨床医学発展を目指します

令和5年12月6日(水)、大ファン・ゴッホ実行委員会設立準備会が設立され、大ファン・ゴッホ展(仮題)が2026年と、2027年に福島県立美術館で開催されることが発表されました。

発表会には、本学からは竹之下誠一理事長兼学長、下村健寿病態制御薬理医学講座主任が出席しました。

本学では、これまでフェルメールやゴッホなどの絵画におけるアートセラピーの融合を進めてきました。アートセラピーは現在、欧米をはじめ世界中のメディカルセンターで行われているメンタルヘルスにおける最新医療です。名画

は、人の心に直接働きかけて感動や安らぎを与えるだけでなく、ストレスを取り除く効果があり、驚くべきことに身体的な症状をも改善することがはっきりと報告されています。

今回の展覧会において、本学はマウリッツハイスの研究などをもとに、独自の研究分野を応用して、鑑賞時の自律神経機能評価やオキシト



シンなどのホルモンの変化を調べます。これらを通じ日本で最初となる、絵画鑑賞や展示の枠を超えたアートセラピーのさらなる臨床医学発展を目指します。

### ① 会期

第1回展覧会「夜のカフェテラス」ほか  
2026年2月21日(土曜日)から5月10日(日曜日)  
第2回展覧会「アルルの跳ね橋」ほか  
2027年6月19日(土曜日)から9月26日(日曜日)

### ② 会場

福島県立美術館  
(福島市森合字西養山1番地)



## GEX e-NEWS

## 本学学生が国際学会に参加しその要旨と論文が学会論文集に掲載されました

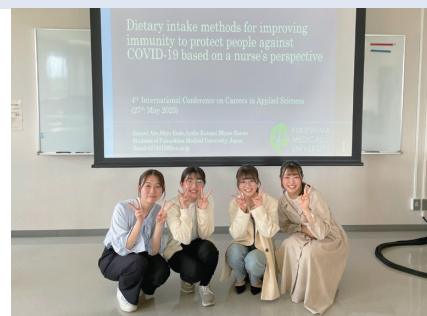
本学は、令和4年度から会津大学主催の国際学生学会(学会名:The Summer International Conference on Careers in Applied Sciences)に参加しています。

この学会はすべて英語で行われる国際学会です。海外の大学や企業も多数参加し、学生たちがお互いの専門分野について紹介し、学術

的交流を深める目的で実施されています。

令和5年度は医学部、看護学部、保健科学部から7名の学生がそれぞれの研究について英語で発表し、その要旨と論文がこの度学会論文集に掲載されました。

英語で学術発表し論文を書くことは大きな達成感と自信につながった、今回の発表にとどま



らず、実生活での実践等、更なる研究活動に取り組んでいきたい、と学生たちは述べています。



## TOPIC

## 本学学生らの論文がオランダ誌に掲載されました

本学医学部6年の川島萌さん(MD-PhDコース、医学部放射線健康管理学講座所属)ら研究チームによる、介護認定と放射線災害による災害関連死との関連を統計的に検証した論文が、オランダ誌「International Journal of Disaster Risk Reduction」(オンライン)に掲載されました。

川島さんら研究チームは、2011年9月から2021年2月までに、震災時に南相馬市に

居住し、南相馬市震災関連死認定委員会により震災関連死と認定された520人の情報を検証し、介護認定を受けた人々は災害の急性期に循環器疾患や呼吸器疾患で死亡し、介護認定を受けていない人々は災害の後期に悪性疾患で死亡していることを明らかにしました。

このことから、災害初期に要介護度が高い人々に医療リソースを割り当て移動中のシステ

ムと口腔衛生に取り組むことで災害関連死の減少につながる事が示唆されたほか、介護申請のない人々において、悪性腫瘍患者の継続的な通院のために病院間連携を強化する必要があると川島さんら研究チームは指摘します。

詳細は  
こちらから



## TOPIC

## 第3回福島県浜通りバイオ産業推進フォーラムを開催しました

令和5年12月14日(木)、本学医療・産業トランスレーショナルリサーチセンター(以下、TRセンター)は南相馬市市民情報交流センターで第3回福島県浜通りバイオ産業推進フォーラムを開催しました。

本フォーラムは、福島復興再生計画に記載の



とおり「TRセンター、国、福島県、医薬品関連企業、浜通り企業等が連携しながら浜通り地域における医薬品関連産業の集積に資する取組を検討するための定期的な意見交換の場」として開催しているものです。

第3回となる本フォーラムには本学、国、県、医薬品関連や浜通りの企業から約50名が出席しました。

竹之下誠一理事長兼学長、門馬和夫南相馬市長の挨拶があり、TRセンター家村俊一郎副センター長からは、「タンパク質マイクロアレイ」の

活用など、TRセンター浜通りサテライトの事業展開について紹介がありました。

また、昨年10月に福島医大発ベンチャーの称号を授与された株式会社チューニングフォーク・バイオ・ジャパンの引地裕一代表取締役、昨年7月に南相馬市にmRNA医薬品原薬製造工場が完成した株式会社ARCALISの高松聡代表取締役社長CEOから、それぞれ事業内容の紹介があり、活発な質疑応答が続きました。今後の浜通り地域における医薬品関連産業の更なる集積に向け具体的な期待が高まりました。